

空き店舗を活用した展覧会周知ツールの提案†

臼井敬太郎*

1 展覧会を切り口にした地域再発見

筆者は、前橋中心商店街協同組合の依頼を受け、地域活性化研究事業「中心市街地におけるアートプロジェクトによる空き家、空き店舗の利活用研究」として、街なかでデッドスペースとなった空き店舗について展示会場として活用する展覧会（「つまづく石の縁 - 地域に生まれるアートの現場 -」 主催：アートによる文化交流推進実行委員会、前橋中心商店街協同組合、共催：アーツ前橋、2018年10月～11月の土休日計12日間開催）の企画に協力した。街なかを舞台にした展覧会の計画には次のような問題意識がある。前橋市の中心市街地における通行量は1994年をピークに減少の一途を辿っている。複数の県立高校の郊外への移転や郊外への大型商業施設の進出にその要因が求められるが、中心商店街店主の高齢化や後継者不足などを背景に、廃業や一時休業に陥る店舗が徐々に発生してきている現実もある。前橋中心商店街協同組合はアーツ前橋と協同でアートプロジェクトとして空き店舗を作品の展示空間として活用し、街なかの交流拠点を増やし、にぎわい創出に向けた可能性を見出そうとしていた。

そこで、これまでに筆者が研究室主体となって前橋市中心市街地で行ってきた建築見学会や街歩きの経験を生かし、中心市街地の魅力を引き出すための周知活動を中心とした展覧会の企画に協力した。具体的には、中心市街地のリサーチを通して、空き店舗を活用した展示計画と運営に協力し、鑑賞者の回遊性をより高めるため街歩きを促すマップやサイン制作など展覧会周知ツール（グラフィックデザインは寺澤由樹氏が担当）の提案を行った。会期中には、筆者が講師を務める街歩きツアーを開催するなど、展覧会を切り口にした人々のコミュニケーションのきっかけを作ることで地域活性化の端緒を作ることを目指した。ちなみに展覧会タイトル「つまづく石の縁」は、ことわざ「蹟く石も縁の端 = 道でつまづいた石さえも、その人といくらかの因縁があるということ。どんなにつまらないことや関係でも大事にしなければならないというたとえ」から命名されたもので、展覧会を通した小さな気づきから人や街、地域再発見の期待が込められている。

2 発見される地域資源と地域課題

この展覧会の最大の特色は、前橋中心商店街協同組合が公立美術館アーツ前橋と連携して取り組む地域アートプロジェクトとして、その成果を美術館ではなく「街な

か」で提示する点である。アーティスト・イン・レジデンスという、作家が地域に一定期間滞在し、地域の方とコンタクトを取りながら作品が生み出される制作過程もユニークであるし、展覧会会場が美術館内ではなく街なかであることは鑑賞者にとっても新鮮な体験である。なお、空き店舗を中心に発表される10組の作品も特殊である。日本、イギリス、ドイツ、韓国、インドネシア、イスラエルなど国内外の作家たちが前橋の地域資源や前橋を通して地域課題を発見し、前橋で問いかけるために作品制作をしている。たとえば、かつてこの地で栄えていた蚕糸業の痕跡やシンボリックな存在である赤城山、そこかしこに散見される古墳、中心市街地の人々、全国的にも関心を集める外国人労働者問題など、前橋固有の文化や歴史から、あるいは前橋の現状を通して見えてくる今日的課題へと制作のテーマが向けられている。つまり、展覧会を構成する展示作品としてのソフトは、前橋だからこそ成立し、この地域ゆえに発見できた地域資源と地域課題である。だからこそ前橋市の中心市街地という土地の歴史や文化の色濃く残す場所で作品を展示することに大きな意味がある。

一方、展示会場となるハードとしての空き店舗については、通常は閉鎖されている場合がほとんどである。そこに不動産として実在していても、何かが行われる場所としては認識されていない。展覧会は、それらが一時的に展示スペースとして公開・活用される。そこで、展覧会を通して、空き店舗について利活用できる場所として認識してもらうこと、これらの潜在的価値に気づいてもらうことが必要である。空き店舗が都市の有用なストックとして読み解かれ、地域資源として再発見されることは地域活性化の観点からも重要である。そのままでは認知されにくいと考えられる空き店舗を活用した展覧会を周知させ、展覧会を通した中心市街地そのものの魅力を発信する仕組み作りが大きなテーマであった。展覧会を共催するアーツ前橋では、空き店舗を活用した展覧会場にスタッフの配置を計画していた。前橋市内で学ぶ大学生を中心に、本学の学生も含めてのべ50名のスタッフが展覧会の会期中に会場スタッフとして、作品の説明や街の紹介役を務めることとなった。会場スタッフは鑑賞者と展覧会をつなぐ重要な役割が期待され、人と街を結びつける意味で、街づくりの一端にも関わっていく貴重な存在であった。このような会場スタッフと鑑賞者をつなぐ何某かのツールを提案することも求められた。

† 原稿受理 平成31年2月28日 Received February 28, 2019

* 建築学科 (Department of Architecture)

3 交流と回遊を促す展覧会周知ツールの提案

展覧会には、作品を目当てに市内外から鑑賞者が訪れる。通常とは異なる街と人の関係が作り出される稀少な機会である。鑑賞者は作品巡りの途上で、アーツ前橋に立ち寄ったり、前橋文学館に足を伸ばしたり、近隣の店舗で飲食したりもするだろう。また、街なかを舞台にすることで、作品巡りをきっかけに街の魅力が発見され、鑑賞者と中心市街地の人々との間に会話や交流が生まれることもあるだろう。このように、中心市街地における交流人口増も期待される。鑑賞者にとって、街を知る絶好の機会となる一方、街の人々にとって、街なかで普段とは異なる鑑賞者による新たな回遊が生まれる大事な機会である。芸術文化施策が生み出す「交流」と前橋中心商店街協同組合が期待する「回遊」をつなげる仕組み作りとして以下3つのツールを提案・制作した。

まず、空き店舗が展覧会場であることを示す「会場サイン」を制作した。先行してアーツ前橋で制作されていたエメラルドグリーン色のリーフレットに合わせ、各会場前に「つまずく石」をモチーフに石をかたどったエメラルドグリーン色のサインが置かれた。制作には地元の実業家の八木隆行氏にご協力いただいた。エメラルドグリーン色のサインが街なかにおけるアイストップとなり、中心市街地ではあまり見かけない色彩が展覧会の入り口として、また空き店舗の積極的利用を示す目印となった。

次に「つまずく石の縁 会場マップ」(図-1)を提案制作した。同マップの特徴は3点挙げられる。1.見開きA3サイズのマップを折り畳む形式とし、ポケットに収まるサイズにまとめたことである。街歩きの際の楽しみは、買い物や食歩きである。そのため地図も収納できるものが好ましい。2.マップにスタンプ欄を設け、スタンプラリーを組み込んだ。中心市街地に点在する展示会場全てにスタンプを置き、すべてのスタンプを集めると景品を入手できる形式とした。結果的には、スタンプを集めて、なるべく多くの会場を巡ろうとする鑑賞者の姿も多く見受けられた。スタンプの存在によって、会場スタッフと鑑賞者の間に会話も生まれた。3.同マップは展覧会出品作家の出身国に対応させて「日本語/英語版」、「日本語/インドネシア語版」、「日本語/ベトナム語版」、「日本語/中国語版」の4種類を用意した。これは展覧会を担当したアーツ前橋 五十嵐純 学芸員の強い希望によるものである。前橋市内で暮らす留学生は少なくないが、彼らの生活は語学学校を中心としたものである。街なかで暮らしている彼らに展覧会を通して、街の魅力に触れてほしいという願いが込められている。実際に展覧会場では留学生の姿も多数見受けられ、周知ツールも表紙次第で国際交流に資するものと気付かされた。

そして、中心市街地における交流と回遊を促すために「つまずく石の縁Instagramハンドアウト(以下、ハンドアウト)」を提案制作した。これはSNS写真共有アプリケーション、Instagramを活用したものである。「つまずく石の縁」の展覧会開催エリアで興味深いものを発見し、撮影したならば誰でも共有サイトに写真投稿

稿できるようアカウント(tsumaishi_pr)を設定した。展覧会関係者や展覧会に関心を寄せる中心市街地在住、在勤、在学の方に撮影と投稿を呼びかけた。しばらくすると、中心市街地で発見された珍しい「石」や「グルメ」、「看板」、「建築」、「風景」などの写真が集まった。一般的には観光名所の範疇に入らないものが大多数だが、中心市街地そこにしかない街の魅力に溢れていた。これら投稿写真から42点抜粋したものを見開きB5サイズのハンドアウトにまとめた。中心市街地の隠れた魅力を伝えるツールとして期待されたハンドアウトは鑑賞者からも注目された。掲載された場所を探す鑑賞者も少なくなく、ハンドアウトを通して街の情報が鑑賞者と展示スタッフの間で交換されることもあった。ちなみに会期中も会場スタッフなどからInstagramへ写真は投稿され続け、街の魅力伝える写真計230点が集まった。

筆者は、「つまずく石の縁 ガイドツアー」(2018年10月20日)講師として、アーツ前橋 五十嵐学芸員と中心市街地を巡った。子どもを含めて30人を超える参加者があった。「会場マップ」に押印できるスタンプを集めながら、また「ハンドアウト」の写真と照らし合わせながら、展覧会開催エリアで発見される歴史の断片、建築の特徴、空き店舗を生かした展示の魅力などを説明した。鑑賞者からは、空き店舗を活用した展示方法や作品だけでなく中心市街地そのものの風情に大きな関心が寄せられた。ガイドツアー終了後も会場マップを頼りに街を歩く参加者、ハンドアウトに掲載されたグルメについて会場スタッフに問い合わせる参加者も見られた。展覧会を周知し、街を楽しむためのツールは、コミュニケーションを生み出す仕組みとして小さな交流の輪を生み出しているように思われた。以上のように、空き店舗の活用が目目されはじめたこと、街なかの滞留拠点や見所が再発見されはじめたことは、注目すべきであろう。展覧会は期間限定の開催であったが、展覧会関係者や会場スタッフ、街の人々、鑑賞者の間で小さな回遊と交流が生まれた。そして周知ツールや人々の縁を通じて、小さな発見や気づきの中で街の魅力が共有されはじめたことは、地域活性化の一助になるものと考えている。



図-1 つまずく石の縁 会場マップ